

2022 年 6 月 16 日開催

**久里浜医療センター作業療法室での新たな試み
—オンラインの活用や横須賀市内多機関との連携—
小砂哲太郎(国立病院機構久里浜医療センター リハビリテーション科)**

1. 依存症領域における作業療法

2022 年にアメリカの国立アルコール乱用・依存症研究所 (NIAAA) がアルコール使用障害からの回復の定義を発表した。そこには「回復とは、個人が診断からの寛解を求め維持し、大量飲酒を止めるプロセスである。また回復にはしばしば幸福感の向上が伴い、それが持続的な回復を促進する可能性がある」とある。また 2018 年に日本作業療法士協会は「作業療法は、人々の健康と幸福を促進するために、医療、保健、福祉、教育、職業などの領域で行われる、作業に焦点を当てた治療、指導、援助である」と定義を改定した。こうした定義から、アルコール使用障害からの回復はここまで行けば回復したという到達点はなく、過程（プロセス）を指しており、その回復に作業療法は寄与できるのではないかと考える。

依存や嗜癖行動に問題を抱えた人々に対する作業療法の役割は、物質使用を断ったり減らしたりするための「健康的な日課や環境的な資源の開発」とされている。先行研究では、物質使用作業療法による社会参加に焦点を当てた介入は良好な転帰を示したことが報告されている。しかしながら、これまで久里浜医療センターでの作業療法は旧態依然とした創作活動や運動療法が中心に行われていた。こうした状況から依存症治療に関わるチームの一員として機能しているとは言えない状態にあった。今回、感染症対策ならびに新病棟への移行を契機に、対象者の地域生活を見据えた作業療法へと改変を行った。

2. オンラインの活用について

アルコール使用障害を抱えた入院中の患者を対象にしたコロナ禍の影響に関する調査では、多くの方が飲酒量や頻度の増加など生活の悪化を認め、入院に至ったことが見えてきた。一方でコロナ禍におけるメリットとして、オンラインの普及が挙げられる。厚生労働省も第二期アルコール健康障害対策推進基本計画ではオンラインによるミーティング活動の支援と明記し、普及啓発のためにオンラインを活用している。当院でも旧来型の対面式でのメッセージ活動が困難となり、自助グループを体験せずに退院を迎える患者も見られ、課題に感じていた。当時は筆者個人のスマートフォンを経由し、地域の自助グループとオンラインで繋がる試みを開始し、その後機器などが少しずつ加えられ、新作業療法室には wifi を完備

してもらうまでに至った。現在はオンラインによる回復施設の紹介や自助グループへの参加はもちろんのこと、複数の病棟を対象にした疾患教育もオンラインを活用し、実施している。さらには企業の開発したスマートフォン用のアプリケーションを活用した外来患者のフォローアップの試みも行うなど広がりを見せている。

3. 横須賀市内多機関連携について

前述した基本計画の中では、地域における関係機関の連携体制の構築が強調されている。先行研究においても、解毒期間後には薬物療法などの医学的介入以上に対処方法や社会資源の獲得に効果が認められている。当院の作業療法では、プログラム改変にあたり、より地域を意識した「退院準備プログラム」を立案した。そこでは、退院後の生活について自身でプランニングを行ったり、これまでの回復施設紹介に加えて、ハローワークをはじめとした就労支援機関より講師を派遣してもらい、退院後の就労について考えたりする機会を取り入れた。さらには高齢者を想定し、横須賀市内の生涯学習センターでの様々な講座やサークル活動を紹介してもらうなど、市内多機関との連携を強化した。各施設には希望者と作業療法士が実際に見学することで、退院後に繋がるための工夫も図っていった。今後も対象者の地域生活を意識した作業療法を展開していきたいと考える。

4. 参考文献

- 1) 小砂 哲太郎, 他: コロナ禍におけるアディクション領域への影響と作業療法の役割. 日本臨床作業療法) 研究 8 : 84-87, 2021
- 2) 小砂哲太郎, 他: アルコール依存症を抱えた対象者への作業療法. 大阪作業療法ジャーナル 35 : 93-100, 2022.